

平成 22 年度前期卒業式式辞

本日、学士の学位を得た 10 名の学部卒業生のみなさん、修士の学位を得た 3 名の大学院修士課程修了生のみなさん、博士の学位を得た 1 名の博士課程修了生のみなさんを、本年度前期卒業生、修了生として送り出すことができますことを大変嬉しく思います。みなさん本当におめでとうございます。列席の理事・副学長、学部長とともにご卒業を心からお祝いいたします。あわせてご家族あるいは関係者のみなさまにも、心からお慶びを申し上げます。



本日のように、前期卒業式を全学的に挙行いたしますことは、今回がはじめてのことです。これまでは学部ごとに学位記授与式を行ってまいりました。しかし近年本学は、前期後期の 2 学期制を実施しておりますから、当然前期段階で卒業・修了要件に達することがあるわけであり、その意味で 9 月卒業は、追加的なことではなく、当然の制度であると考え、ここに全学的なものとして学位授与式を行うことといたしました。

みなさん方は、学部でいえば 4 年、修士・博士前期でいえば 2 年、博士後期でいえば 3 年を越えて在籍されました。時間というものは、物理的には同じものであっても、個々人にとっては、それは量的にも質的にも異なった意味をもつものであります。通常よりも長く在籍された時間は、みなさんそれぞれに意味ある経験の時間であったことと思います。みなさんは、大学・大学院における学業、研究、課外での活動や学び、あるいはプライベートな経験のなかで、学業的な学びだけではなく、いかに生きることが自分にとって意味のあることなのかを考えもされたのではないかと思います。

本日をもって卒業するみなさんには、本学在学中の経験を生かし、自分自身の人生が意味あるものとなるような社会参加をしていただきたいと思います。

以下は3月の卒業式においても述べたことではありますが、あえて同じことばをみなさんに送りたいと思います。

早く進むだけがいいことではないのです。卒業後の人生においてまた、他者よりも遅れること、また新たな環境、新しい人間関係に大きな不安を抱えることもあるでしょう。人間はしばしば、深刻な苦悩に陥ると、自らを孤立に追い込むことがあります。

「自己責任」という言葉が支配するなかで育ってきたみなさんにとっては、他人の力を借りても良いとは考えられないのでしょうか。近しい友人であっても苦悩をともに語り合うことが苦手のように思われます。私も大学教員としてのこの30年、人間関係に苦悩している学生の光景をみてきました。困難に直面し不安を抱えていてもそれを表現しなければ誰も気付きません。苦悩を表現すれば苦悩を共有し、共感してくれる人はいるのです。あなたの苦悩は、決して孤立したものではありません。

そもそも完全なる人間はいないのです。Nobody is Perfect. 一人ひとり是不完全であり、補い合うこと、支えあうことなしには自立できないのです。みなさんは子ども時代、大人たちの「自立しなさい」というメッセージを受け取ってきたと思います。しかし、Nobody is Perfect.

と考えれば、自立とは、自分だけではできないことがあることを自覚し、頼らざるを得ないところは他者に依存する。他者の援助に対しては感謝を表現すること。逆に他者に支援を求められたときにはためらわ



ず援助すること、そのような他者との関係をきづくことによって「自立」は可能となるのであります。その意味で「自立」とは共同的なものであるということ、つよくみなさんにお伝えしておきたいと思います。みなさんが卒業後、苦悩や挫折に直面し、他者への依存の必要を感じたとき、母校である和歌山大学も依存の対象としてぜひ思

い起こしてください。和歌山大学は、大学の使命として在学生の支援はもちろんのことではありますが、同窓会の先輩方とも協力し、卒業生の生涯にわたる支援の仕組みを強めていくつもりです。そのことを最後にお伝えし式辞といたします。

平成22年9月24日

国立大学法人和歌山大学
学長 山本健慈